

何ならずして、城の要害、残る所なく出来しければ、敵は興を冷して引退く。即ち秀吉を大將として、人數を添へて籠め置き、禁制條々を書出して、軍兵に示し定めらる。其後敵又押寄せ、秀吉の軍兵をおびき出し、附入せんとする氣色にて、弱々と引取る。稲田大炊助見咎めて曰く、敵の爲體心あり。城中の軍兵、一人も打出づる事なかれ。秀吉も同心に制して、柵より外に一人も出されず。敵既に案に相違して引退く。稲田大炊助・蜂須賀小六・加治田隼人等、相議して曰く、今夜押寄せて、敵を夜討にせんと、斯くて日頃より、略を興へ置きし敵方の者を呼寄せ、敵の事共を尋ぬるに、今日の軍に疲れて、今夜は皆寢入るべし、能き時節なりといふ。秀吉等、皆城を出でて敵陣を窺ひ、蜂須賀・加治田を小將とし、稲田を弓鐵炮の大將とし、竊に入りて敵を殺し、首十三級を取りて歸る。秀吉即ち書を清洲に遣す。信長大に喜び給うて、秀吉に、御持鍵・持筒を給はり、并に旗を許され、蜂須賀・稲田・加治田等、各勸賞あり。

大澤次郎左衛門といふ者は、美濃宇留馬城主として、而も大剛の兵なりけるを、秀吉さまざま語らひ、策を運らして、信長に屬せしめ、清洲の城に連れ参りて、信長に對面せしむ。其夜信長、竊に秀吉を召して宣はく、大澤は大剛武勇の者なり。今より後に、又心を變じて、敵になる事あるべし。只首を刎ねられんとあり。秀吉諫めて曰く、大澤は、強敵の張本なり。最も誅すべしと雖も、若し之を殺し給はば、誰か重ねて味方に參るべき。只宥め置かれて然るべきかと。信長更に許し給はず。秀吉家に歸り、刀脇差をも差さず、大澤に向ひて曰く、我れ汝を疑ふ心あり。汝、我を人質に取りて、今夜速に逃去るべしとなり。大澤心得たりというて、刀を秀吉の喉に差當て、世の常の人質の如く、胸倉を捕へ、秀吉を打連れて其夜逃去りぬ。大澤が振舞未練なりと、人皆笑ひ合へり。

公方義昭、六條の城より、二條の城に移り給ふ。信長、御暇申して、國に歸り給ふ。義昭宣はく、武勇の侍一人を止めて、城を守護せしめられよとあり。諸人皆思ふには、佐久間信盛か、柴田勝家か、丹羽長秀か、此外はあるべからずと思ふ處に、木下秀吉を止めて、二條の城を守らしめらる。諸傍輩皆案に相違して、誹る人も多かり

き。次の日秀吉、二條の城に至り、上野中務少輔清信を以て、義昭へ、御禮申すべき由望まれしかば、義昭出でて對面あり。是より秀吉の威勢強くなりけるを、嫉む輩多く、信長に讒言する事度々なりけれども、信長、更に聞入れ給はず。

同十一年四月、信長、既に近江國箕作城を攻められし時、秀吉先登して、遂に城を攻め落す。其の事は、信長傳にあり。

元龜元年の夏、淺井備前守長政・朝倉義景力を合せて、信長と敵對す。信長自ら赴きて之を攻めらる。秀吉、先陣を望み申す。信長許し給ふ。美濃國の住人竹中半兵衛尉重治・牧村氏・丸毛氏三人を相添へて、前陣たらしむ。

天正元年、信長、既に淺井・朝倉を打亡し、淺井が領地を、秀吉に賜はる。秀吉、即ち小谷の城に移り住す。然れども小谷は、雪深き所なれば、往來の惱あるを以て、同二年春の頃、今濱に城を構へて、長濱と名を改めて、小谷より移りて住み給ふ。其外秀吉は、信長の仰に依りて、城を攻め落し、領地を奪ひ取りし事、更に其數知らず。其事共は、皆信長の傳にあり。

同五年十月、信長、即ち播磨國を秀吉に給はる。東播磨は悉く従ふ。小寺官兵衛も、志を秀吉に通ず。佐用氏・上月氏の一族共、更に服せず。秀吉、これを攻めらる。上月氏の城は落ちければ、山中鹿之助を居ゑて守らしむ。佐用城を攻めらるゝに、小寺官兵衛先駆して、遂に攻め落す。城主兄弟を討取る。秀吉、此由を清洲に告げ申す。信長大に喜び給ふ。官兵衛は、後に入道して、如水圓清と號す。

同六年三月、秀吉、即ち信長の命を受けて、重ねて播州を伐ち給ふ。別所小三郎長治、之に従ふ。長治は、播州東八郡の守護なり。時に長治が伯父別所山城守賀相といふ者、長治に語りて曰く、羽柴秀吉、此國に來りて勢強し。殃必ず我身に懸りて、別所の一族、亡されん事疑なし。いかゞはせん。汝は我甥なり。我を捨つる事なかれといふ。長治之に一味して、秀吉を反きて、三木城に楯籠り、要害を構へて人數を集め、即ち評定して曰く、此事早く京都に聞えなは、軍兵馳せ下りて急に攻むべし。然らば城廓も、要害備はらず、兵糧も乏しかるべし。策を運らして、其間に城を堅固に用意すべきなりとて、偽りて書札を京都に遣し、反逆の企なき體を示し、

其後、長治、諸城を構へ、櫛橋左京進に、志賀多の城を守らせ、神吉民部少輔は神吉の城、梶原平三兵衛は高砂の城、長井四郎左衛門は野口の城、淡川彈正は淡川の城、衣笠豊前守は、波志谷はしやの城を守る。長治及び其弟小八郎治定、彦進ひこのしん友行、山城守賀相、其外上月・中村・高橋・服部・後藤・長谷川・神澤・大村・三枝・上原・魚住・賀古・飯尾・藤田等の輩は、皆三木城に籠る。羽柴秀吉、此由を聞きて曰く、我れ長治を以て、播州の案内者にと思ひしに、反逆を企つる事はいかにぞや。されども亦恐るゝに足らずとて、別所孫右衛門重棟を呼びて問うて曰く、汝も亦反く心あるやと。重棟、涙を流して物いはず。秀吉の曰く、是れ定めて、山城守が所爲しわざならん。汝即ち書を長治に遣して、其心を察せよと。重棟使を遣して、再三諫むれども、長治遂に従はず。秀吉、さらば三木の城を攻めんとするに、軍兵多からず。小寺官兵衛に問うて曰く、何れの所にか陣を取らんと。小寺が曰く、書寫山は僧坊多く、兵糧乏しかるべからず。彼寺に陣取りて、信長の加勢を待ち給へと。秀吉、即ち書寫山に入りて陣取る。寺僧等恐れて逃げ隠るゝ。秀吉宣はく、彼僧法師等に何の咎あるや。若し殺害せ

ば、曲事たるべしと。斯くて野口の城を攻めらるゝに、城主長井忠左衛門降人に出でて、城は落ちたり。是より先に、長治と毛利輝元と同心す。是に於て、輝元より吉川駿河守元春・小早川左衛門佐隆景を遣し、宇喜多直家が兵を合せて、長治が加勢とす。其軍勢凡そ五六萬騎、上月の城を取巻く事、十重廿重なり。城主山中鹿之助、即ち秀吉に加勢を乞ふ。秀吉、即ち小寺官兵衛等を遣して、高倉山に陣を取らしめらる。吉川元春・小早川隆景、多勢なるを以て、軍兵を二に分けて、一は城を攻め、一は秀吉と戦はんとす。秀吉飛脚を立て、信長に告げたり。信長、即ち嫡子信忠を大將として、佐久間右衛門尉信盛・瀧川左近將監一益を差添へ、軍兵一萬五千を率して、加勢し給ふ。大將信忠、既に神吉城に取懸けて攻めらる。城主神吉民部、之を防ぐ所に、民部が一族神吉藤太夫、既に大將民部が首を切つて、降人に出でつゝ、城を開渡す。玆に至りて信忠歸り給ふ。初め信忠、京を打立ち給ふ時に、父信長も、押續きて打立ち給はんとせしかども、羽柴秀吉の武邊の譽を猜む者共、信長を止め奉る。是れ秀吉を、敵に追捲らせんとする爲めなり。或日毛利輝元が加勢の兵、野

伏を出して、秀吉の草刈を殺す。秀吉の兵共野伏を打殺す。是に於て、毛利方より軍兵大に出でて戦ふ。秀吉の兵尾藤・戸田、眞先に進みて疵を蒙る。宮田氏は、討死しける程に、秀吉の軍開き靡きて、既に敗北せんとす。竹中半兵衛重治之を見て、軍兵を引取る。此時、信長の使者又來りて、秀吉早々引退くべしとあり。秀吉力なく、書寫山に歸る。山中鹿之助大に力を落して、毛利方に降人に出でけるを、遂に誅しけり。秀吉、即ち信忠の家に行きて曰く、後詰の援なき故に、上月の城落ちて、鹿之助殺されたり。是れ公の過なりと。信忠深く恥ぢて、軍兵を集め、三木の城を攻干さんとして、八月に、城の邊に赴き、秀吉を平山に陣取らせ、信忠、京に歸り給ふ。十月に、長治・賀相等評定しけるは、敵の勢は僅に三四千、味方は七八千なり。此多勢にて、小勢に取圍まれん事は、誠に口惜しからずや。城を出でて勝負を決せんといふ。諸人皆然るべしと同す。則ち軍兵を出して、平畠といふ所に陣を取る。山城守賀相・小八郎治定、大將たり。中村孫平次が城に取懸けて攻めける所に、秀吉後詰せらる。賀相・治定等此由を見て、中村を打捨て、秀吉に攻懸る。

秀吉の先陣、備を亂して危し。秀吉の弟羽柴美濃守秀長後に大和太に戦うて、賀相治定が陣を破る。秀吉、押續きて攻め戦ふ。敵軍の中に、久米五郎久勝・志水彌四郎直近等、皆討たれて、敵兵大に亂れしかば、山城守賀相は、逸足の馬に策わざを打ちて、城中に逃籠る。治定は討死す。樋口太郎、其首を取る。長治等は、丹生山に城を構へて、毛利家よりして、兵糧を運び入る。秀吉急に攻められければ、兵糧を入る事叶はず、三木の城に取入る。其後毛利輝元・小早川隆景は、三木の城を救はんとて、數百艘の兵船を漕出して、明石の魚住に着く。秀吉之を聞きて、三木と魚住との道を取切らん爲めに、君が峯を取圍み、子城卅餘箇所を構へ、堀を附け堀を深くして、兵を入れて守らせらる。茲に至りて、三木と魚住との通路、絶果てにけり。同七年の春、別所長治軍兵を出して、秀吉の一子ひとつひの城を攻むる。此城には、古田吉左衛門・神古田半左衛門・中西彌五作三人、大將として守り防ぐ。古田は箭に中りて死す。長治が兵も多く討たれ、又は疵を蒙りしかば、城に引返す。

三月、信忠大軍を率して、重ねて播州に至り給へば、秀吉の陣を、三木の城下近き邊

に移さる。城中更に追拂ふ事能はず。

四月、信忠、都に歸らる。秀吉の臣下竹中半兵衛重治は、武勇智略の名臣なりける。重き病に罹りて、醫療術を盡せども效なし。京へ上せて養生せさするに、微は驗あるに似て、大なる效なし。重治が曰く、軍陣の中に死するは、武士の望む所なりとて、播磨の平山の陣に歸り、六月に、遂に死にけり。年未だ卅六。秀吉、大に歎き惜まれたり。

九月、別所長治軍兵を出して、谷大膳衛好が守る所の陣に押懸けて、急に攻めければ、衛好防ぎ戦ふに、力盡きて討死す。秀吉此由聞きて、旗を進めて打たんとす。別所山城守賀相、三千餘騎にて、大村の前に陣取る。秀吉、僅に三百餘人を、魚鱗に備へて駆入りつゝ、短兵急に取拉ぎ、突伏せ切倒し、四角八面に追捲くる。山城守駆立てられて、遂に敗北し、討たる者六百餘人なり。是より城中大に恐れて、歎き難く思へり。其上に城中兵糧乏しく、糟糠を食ひ、犬鶏を殺し馬を刺殺して、之をも喰ひ盡し、後には死人の肉を、争ひ分ちて喰ひける程に、餓死する者數を知ら

ず。秀吉の軍兵は、いよ／＼氣に乗り、城中の兵は、日に從うて弱り衰ふ。

同八年正月、秀吉、秀長、既に三木の城を攻めらるゝに、城中の兵、毎日に討たる者多し。日數經て、長治、其弟彦進友行を呼びて曰く、此城既に兵糧乏しく、軍兵疲れ、防ぎ戦ふに力衰へ、城の危き事織の如し。久しく有つ事叶ふべからず。今夜我れ自害して、城中に残れる軍兵共の、命を助けばやと思ふはいかに。然らば先づ、寄手の方へ此由告げて、其返事に依りて相計らはんといふ。友行、即ち書を認めて、淺野彌兵衛長政に遣して曰く、天運既に通り、長治、賀相、友行等自害せんとす。城中に残りける軍兵以下、此等を殺されなば、不仁無慈悲の至なるべし。若し憐みて助けらるれば、我等の喜、之に過ぐべからずとなり。淺野彌兵衛此由申すに、秀吉うけがひて、酒肴を城中に送り遣さる。長治大に喜びて、上下の軍兵等残らず召寄せ、最後の酒宴を致し、十七日の早天に、長治出でて、垢離をかき香を焚きて、彦進友行を使として、山城守賀相にいはせけるは、城中兵糧盡きて、軍兵疲れたり。我等死して、彼等を助けんと思ふ。只今自害すべし。同じ道に伴ひ申さん、必ず後れ給

ふなよとあり。賀相が曰く、我輩空しくなりて、軍兵共の死なざらんには、益もなき事なり。城中の軍兵と、同じく死すべしといふ。城中上下の兵共、皆怒りて曰く、賀相偽を構ふ。頼もしげなき人に向つて、誰か命を捨つべきとて、賀相を殺さんとす。賀相櫓に上りて、火をかけて城を焼崩さんとす。家人等押詰めて、賀相を刺殺す。斯くて長治、先づ妻子を刺殺し、我が身も自ら首掻落して死す。年廿三。彦進友行も自害す。年廿一なり。三宅肥前治忠入道は、長治が舊好の家老なり。同じく自害す。秀吉其の首を取りて、皆信長に送り奉りてより、播州平かに治まり、秀吉、三木の城に移り居せらる。

月日幾干ならずして、家人數千間城下に立續けて、軒を争ふ。誠に政徳仁慈のしるしなりと、人皆驚き感じけり。是よりして、但馬備前美作、皆附従ふ。其外西國・四國の人民、何れも秀吉の風を望まずといふ事なし。

小寺官兵衛、既に秀吉に語りて曰く、三木の城は、播州にては傍なれば、某居住の姫路こそ、一國の中央にして、而も四國・九州より京都迄、船の通路も心の儘なれば、播

磨を領せん輩は、姫路に過ぎたる住所あるべからずと申す。秀吉、即ち姫路に移りて、しばしありて但馬に赴き、舎弟美濃守秀長を、國守として居ゑ置かる。

西播磨廣瀬といふ所に、宇野氏某といふ者、城を構へて楯籠りけり。秀吉、之を攻むる事甚だ急なり。宇野、竊に城を出でて、西國に落下らんとす。荒木平太夫追懸けて、之を打取る。

同九年の春、秀吉、姫路の城を作らる。六月廿五日、秀吉大軍を率して、因幡の國に赴き、鳥取の城を攻めらる。城には山名豊國後に入道して禪高と號す・吉川式部少輔隆久・森下出

羽入道道與・中村對馬守春次が籠りて、守る所なり。吉川・森下・中村は、毛利が家人なり。山名豊國、即ち秀

吉に内通して、城を出でつゝ、寄手に加はる。吉川・森下・中村、いよく固く守り防ぐ。秀吉附城を構へ、陣を連ね、日夜に之を攻むる。毛利輝元加勢を遣し、後詰を致さんとするに、兎角して果さず。城中甚だ苦しみて、又兵糧乏しくなり、牛馬死人等を食ひて、餓死する者城に滿つ。命ある輩も、手足なえ、よろめき倒れて、弓をひき太刀を握るに力なし。是に於て、吉川・森下・中村、評議して曰く、今此急難を逃

れんとするに、落行くべき道なし。網にかゝれる魚の如し。毛利輝元、加勢後詰の約束を違へられ、我等死すべきに極まれりとして、福光小三郎を遣して、淺野彌兵衛長政に言送りけるやう、城既に危く、攻落されん事近し。大將三人自害すべし。願はくは残れる城中の者共の、命を助けらるれば、三大將の喜ならんと。秀吉聞きて其契約をなし、酒肴食物を城中に送らる。吉川・森下・中村大に喜び、城中上下の軍兵共を召集め、暇乞し、酒宴をなして後、自害の時刻を、秀吉に告げ知らせたり。秀吉即ち堀尾茂助吉晴を、檢使に遣す。吉川・森下・中村は、城を出でて寺に至り、堀尾に對面して、禮儀を致し、各腹切りけり。堀尾、即ち三人の首を取りて立歸らんとす。福光小三郎・坂田孫次郎、二人進み出でて曰く、我等日頃吉川が恩を受けて、今に報ずる事なし。同じく死して之を報せんとて、二人刺違へて死す。秀吉は、此三大將の首を見て、涙を流して、義の深き事を感じ、やがて城中の軍兵共を出して、粥を煮て食せしむ。日頃久しく食に飢えたる故に、俄に多く食ひける者は、皆死しけり。少く食ひける者は、命恙なく、漸々に氣力本服したり。其後五萬石を、宮部善祥坊

鳥取城を
陥る

に差添へて、城代として守らしむ。又伯耆國羽衣石城は、南條勘兵衛之を守り、岩倉城には、小嶋左衛門尉を籠めて、守らしめらる。

十月、吉川駿河守元春、軍兵を率して之を攻む。秀吉、即ち宮部善祥坊に語りて曰く、今鳥取の城を攻落す。軍兵共、定めて大に疲れぬべし。然れども羽衣石・岩倉を攻落されなば、敵の勢強くなるべし。我れ甚だ憂へ恐るゝなりと。善祥坊が曰く、加勢後詰を出して救ふには如かじと。秀吉、即ち増田仁左衛門を遣して、軍中の事を計らはしめ、秀吉、既に伯耆に赴き、鎧冑といふ所に陣を取らる。吉川元春、引退きて鳥山に陣取る。秀吉、近邊の村里を焼拂ひて、兵糧米を奪ひ集めて、羽衣石・岩倉の兩城に入れられ、必ず南條・小嶋、慎みて城を能く守るべし。敵縦ひ近く攻寄せて挑むといふとも、城を出でて戦ふ事なかれと仰付けられ、秀吉は、十一月に、播磨の姫路に歸らる。

信長、既に秀吉及び池田勝九郎ゆきすけ之助を以て、淡路の國安宅木河内守が籠りし由良の城を打たしめ給ふ。安宅木、既に城を圍まれ、力衰へて降人に出でたり。池田之助、

之を召連れ、江州安土に至りて、信長に對面せしむ。秀吉、既に姫路に歸らる。十二月、秀吉、歳暮の御禮の爲め、姫路を立ちて安土に赴き、菅屋九右衛門・堀久太郎を以て申入れらる。信長大に喜び、菅屋・堀を遣して、秀吉にいはしめ給ふ。今年諸所の軍陣に、苦勞いふ計りなし。今は其上そのかみの藤吉郎にはあらず、國持の大名なり。明日御振舞給はるべしとなり。秀吉大に謝し申して、安土の城に登られしかば、信長立出でて對面あり。心地よげにおはしぬ。秀吉平伏して罷り出でつゝ、微明に登城あり。國久の太刀一腰、銀千枚、吳服百鞍、蓋の馬十疋、播磨杉原三百束、滑革二百枚、明石千鯛、千箇、野里の鑄物色々、蜘蛛三、千連を奉らる。山上より山下に至る迄、山に山を積上げたり。信長、殿主より之を見給ひて宣はく、大膽大器者、羽柴筑前守が持參の物なりとて、諸人に見せしむ。人皆驚きて曰く、夥しき事、未だ更に見たるためしなし。堆き物かなといへり。信長宣はく、我も遂に、斯の如く大なる捧げ物は見ず。羽柴は、天下無雙の大膽者なり。縦ひ支那身毒を打たしむとも、否とは辭退せじと宣ふ。信長いと快くおはせしかば、近習皆喜ぶ。斯くて信長、出でて秀吉

高松城を
攻む

に見え給ひ、厚くもてなして御茶を賜ふ。丹羽五郎左衛門・長谷川丹波守・醫師道三、相伴とす。其後さまざま御物語おはして、歸國の御暇給はるに、國次の脇指を下さる。是は備前守信秀の遺物なり。堀久太郎持ちて、秀吉の家に至る。秀吉頂戴あり。同十年三月、秀吉軍兵を率して、備中國に至り、冠城を攻落す。夫より河屋城に取懸けて、攻めんとするに、戦はざる以前に降參す。猶進みて、高松城を攻めらる。要害險阻の名城にて、輒く攻め難し。城主清水長左衛門尉は、聞ゆる名將なり。毛利輝元が股肱の家臣なり。輝元、即ち難波傳兵衛・近松左衛門に、軍兵二千を差添へて、加勢しければ、城中大に強りて、落つべき色なし。秀吉、即ち城の有様を見て、是れ水攻に勝る事あるべからずとて、城の圍三里の間に堤を築き、大河谷水を堰入れしかば、日を重ねるに従ひて、水漫々と湛へて、大海の如し。堤に添うて、附城を所々に構へ、夜廻晝番怠らず。五月に、小早川隆景・吉川元春、五萬餘騎を率して、釋迦峯不堂嵩に陣を取る。其後毛利輝元三萬餘騎にて、同じ峰に陣取る。城中大に喜ぶ。然れども河水湛へて、城中に通路する事叶はず。秀吉、書を信長に奉りて曰

く、高松の城を攻干さんこと、近きにあり。然れども輝元、數萬の軍兵を率して、城中に加勢せらる。若し軍兵を下し給はらば、夫に高松の城を取卷かせ、秀吉手の軍兵を以て、輝元を打靡かさば、西國は即時に、平げ鎮めんと申遣しければ、信長、さらば加勢を秀吉に遣さんとして、惟任日向守光秀・筒井順慶・長岡與一郎・忠興・池田紀伊・守信輝父子・中川瀨兵衛清秀・高山右近等を始として、軍兵都合三萬五千餘騎を遣して、秀吉を助け救はる。毛利右馬頭輝元、既に高松の城を救はんとすれども、秀吉の策に押へられて、進む事能はず。其間に水いよく重なり湛へて、蛇・蚊・鼠等集り出で、城中にみちくたり。女童は恐れ惑ひて、絶え入る事毎度なり。水既に城を浸すに至りて、城主清水長左衛門、其兄月清入道にいふやう、斯の如くならば、城中、水に溺れ死なん事疑なし。我等自害して、城中の軍兵を助けんと思ふはいかにと。月清入道、我も斯く思へりとして、難波・近松に問ふに、皆然るべしといふ。六月三日、清水長左衛門、書を遣して秀吉に申す。秀吉契約して、酒肴を城中に送らる。清水大に喜び、軍勢に暇乞ひ、酒肴をひろめ、次の日小舟を乞ひて、清水兄弟・難波・近松、之

高松城を
陥る

に乗りて堤に向ふ。先づ城中の諸道具、其所々に飾り、書付を壁に押して曰く、我等死して後、秀吉に渡すべしとて、舟に乗りて、城の門外に漕出し、水の上にして、腹切つて死す。秀吉其城を取り、杉原七郎左衛門尉家次を居ゑて守らしむ。同月三日、長谷川宗仁が許より、飛脚を以て、秀吉に遣して曰く、昨二日の朝、惟任日向守光秀が逆心に依りて、信長・信忠、御生害ありとなり。秀吉聞きて、大に驚かれしかども、更に取亂さず。次日數百騎を率して、陣屋々々を巡り見給ふ。是より先に、毛利輝元、和睦すべき旨申入れ、備中・備後・伯耆三ヶ國を奉らんと、起請文を以て申遣さる。今猶頻に和睦せんと申さる。秀吉、先づ信長の御事に依りて、暫く和睦せんと計り給ふ。既に吉川元春・小早川隆景が使者、又來る。秀吉心に思ひ給はく、信長の事、隠すとも隠し遂げじ。遂には隠あるまじ。只今の儘に語らんと、其の使者に語り給はく、信長公は、明智光秀が爲に御生害あり。それとても毛利、和睦の約を變改あるまじきや。汝先づ歸りて、此由輝元に問ひ來るべしとなり。使者立歸りて申す。輝元、即ち吉川・小早川等を集めて評議す。或は是非に惑ひて物

いはず、或は只軍兵を安藝に引入れて、時を窺ひ給へといふ。小早川隆景進み出でて曰く、信長の生害は、秀吉の不幸なり。されども秀吉、京に上り、日向守光秀を打平げらるれば、其勢天下に満ちて、之を防ぐ者あるべからず。只今和睦の約を變改せば、秀吉の恨、骨髓に徹せん。然らば毛利家の滅亡疑なし。されば秀吉は、智略武勇の名將、大膽氣情の強士なり。天下を取るべきは、誰か此人の外にあらんや。今いよ／＼和睦の親をなし、信長の死去を弔はれなば、秀吉の喜計りなく、是れ毛利家の繁昌ならんと申す。輝元之に従ひ、内藤越前守廣俊を使者として、信長を弔はせられ、又蜂須賀彦左衛門尉正勝を以て、秀吉に申さしむ。信長縦ひ果て給ふとも、和睦の事變改すべからず。輝元及び元春隆景、更に秀吉に遺恨なしとあり。秀吉大に喜びて曰く、我れ思はく、輝元若し和睦の約束を變せば、宇喜多秀家を茲に止めて、秀吉は京に上りて、光秀を討たんと思ひける所に、毛利其約を變ずまじくば、目出たき首途なりとて、互に起請文取交し、鐵炮五百挺、弓百張、旗三十本を輝元に乞うて、六日に高松を引拂ひ、八日に、姫路に歸る。

輝元と和す

織田七兵衛信澄は、武藏守信行の子なり。信行は、兄の信長に殺されし故に、信澄之を恨みける事、尤も其の根深し。而も日向守光秀が智なり。此時大坂にありしが、上洛して、光秀に力を合せんとせられしを、信長の三男三七信孝・丹羽五郎左衛門長秀相議して、大坂を攻められしかば、七兵衛信澄、打負けて死せらる。

秀吉は、姫路を立ちて、尼崎に至り、髪を切りつゝ、使者を、三七信孝・丹羽長秀・池田信輝及び其子之助等に遣して曰く、我れ今主君の惡敵日向守光秀を討たん爲に、是迄上りぬと。是に於て皆尼崎に會合あり。池田信輝、入道して勝入と名づく。軍評定ありけるに、勝入、高聲に曰く、先陣は我なるべしと。高山右近進み出でて曰く、山崎の合戦は、次第を以ていはゞ、先陣は某、二陣は中川瀨兵衛、三陣は池田なりと。秀吉曰く、信長公の時、軍立の定め、斯くの如し。今猶其法を守るべしとあり。是に依りて六軍の列定まりて、山崎に押進む。高山は高槻の城主、中川は茨城の城主、池田は有岡・尾崎・花隈の三城を守る。此故に近所より遠所を、漸々後陣に定めし先例を以て、高山斯く申しけり。

日向守光秀、安土の城に行きけるが、明智左馬助を殘して、五畿内を静めんとて、八幡の近所に、洞が峠といふ所に至り、大和の筒井順慶を招けども、來らず。光秀憂へて、我が二男小阿古を人質に遣しけれども、順慶、遂に來らず。時に日向守光秀は、羽柴筑前守秀吉、播磨の姫路を立ちて、攻上ると聞きて、軍陣の列を定む。山崎の先陣は、齋藤内藏助利三、柴田源左衛門二千餘騎、江州の勢三千餘騎を相副へたり。山手の先備松田太郎左衛門、並河掃部二千餘騎、右の方の備は、伊勢與三郎、諏訪飛騨守、御牧三左衛門二千餘騎、左の方の備は、津田與三郎二千餘騎、次に光秀五千餘騎にて、旗本の備を立てたり。羽柴秀吉の軍兵は、先陣は、高山左近二千餘騎、二陣は、中川瀨兵衛尉清秀二千五百餘騎、三陣は、池田勝入父子五千餘騎、四陣は、丹羽五郎左衛門長秀三千餘騎、五陣は、三七信孝四千餘騎、六陣は、秀吉二萬餘騎にて進みけり。爰に齋藤内藏助は、洞峠にありて、使を日向守光秀に遣して曰く、秀吉大軍を以て押し來る。只同じくは、今日の軍を止めて、坂本の城に籠り給へかしといふ。光秀大に怒りて曰く、主君を殺す事は、なり難きものなり。我れ能く之を

光秀を攻む

なす。何物か此勢に對すべき。汝心易く思ひて、早く爰に來るべしと返事す。十三日、光秀、山崎に陣取り、松田太郎左衛門を呼びて曰く、汝早く天王山に登り、山崎を直下して、弓鐵炮を敵陣へ打入れさせよと。松田、七百餘人を率して登る。羽柴秀吉は、堀久太郎秀政及び堀尾茂助吉春を遣して、天王山に至らしめらる。敵味方、はしたなく出合ひて相攻むる。秀政能く戰ふ。松田敗北して引退く。然るに先陣高山右近は、山崎の南門を閉固めて、他の軍兵を通さず。光秀が先陣伊勢與三郎、諏訪飛騨守、御牧三左衛門、其弟勘兵衛と大に戰ふ。二陣中川瀨兵衛は、坂を登りて、左より懸り、三陣池田勝入父子は、川を渡して、右より懸る。三陣に押包まれて、光秀が江州の兵、裏より崩れて、伊勢、諏訪、御牧皆討死す。光秀馳向うて、加勢すべきといふ。比田帶刀、之を止めて諫めけるは、此軍味方大に亂れて、大事に及べり。先づ勝龍寺に籠り給ふか、今夜竊に坂本に赴くか、此兩條分別あれといふ。光秀忙然として度に迷ひ、勝龍寺は何方ぞといふ。比田馬を引ききて、此方へとて進む。敵軍早其道を取塞ぐ。光秀僅に逃れて、閑道より勝龍寺に入りたり。凡そ今日

の合戦は、中川瀬兵衛清秀、大功の働を以て、日向守光秀が軍兵、一時に敗北せり。織田三七信孝、即ち清秀が手を執へて、汝の働を以て、敵を切崩して勝軍したり。本意を遂げし大功を、何れの時にか忘れんとありしに、羽柴秀吉其後にありて、輿に乗り乍ら曰く、瀬兵衛々々骨折々々と申されしを、清秀聞きて曰く、筑前守がなめげなる言葉其の容付かほつき、既に天下を我物に吞入れたる氣ありといひけるこそ、誠に能く當れるなれ。

惟任日向守光秀、既に勝龍寺に入りて、其軍兵を見れば、僅に千人に足らず。日暮に至りて之を見れば、何地いづちへか落失せけん、兵只百騎にだにも足らず。光秀、之には中々叶ふべからずと思ひ、夜に入りて勝龍寺を出で、竊に伏見を指して赴き、小栗栖に懸りて、坂本の城に行かんとす。明智庄兵衛進士作左衛門村越三十郎堀毛與次郎山本仙入三宅孫十郎、僅に五六騎打連れて落行く所に、野伏共蜂の如く起り、蟻の如く集りて、藪の中より、鎧を以て突くに、光秀が右の脇を、したゝかに刺す。夫より三町計りにして、馬より落ちたり。是は如何にといふ。光秀が曰く、

光秀討た
る

先に竹藪の中より出でし野伏に突かれて、腸出でつゝ斯の如し。早く我首を切つて、深く藏せよとて、息切れ空しくなる。明智庄兵衛、其首を取りて、馬鞆に包み、溝の中に藏し、屍をも、道の傍なる深田に埋みて、皆ちりゝゝに落失せたり。明智左馬助は、安土城にあり。秀吉攻め來ると聞きて、我れ此城にありても益なし。光秀と一所に死なんとて、山崎に赴く。堀久太郎秀政に行遇うて、大津打出の濱にして戦ふ。左馬助敗北して、坂本の城に籠る。されども軍兵皆落失せて、城を防ぐ力なし。是に於て光秀が子に自然といひしを初めて、子息三人、息女三人を刺殺し、城に火をかけ、我身共に焼死す。

十四日、秀吉、三井寺に至る。小栗栖の里人、惟任日向守光秀が首を持來る。秀吉大に喜び、杖を以て其首を打ちて曰く、君を弑せし天罰早く來りて、斯の如しやと宣ふ。

齋藤内藏助も、江州堅田に落行きけるを、里人生捕りて、秀吉に參らす。秀吉又、光秀が屍を尋ね求めて、彼首を續つぎて、栗田口に磔にかけ、内藏助も、同じく磔にす。

秀吉、船に乗りて長濱に赴く。是れ秀吉の舊領なり。茲に江州淺井郡山本に、安土萬五郎といふ者、光秀に志を通ず。光秀、既に信長を弑すと聞きて、我手の凶賊を率して、長濱の城を攻取りて、籠り居る。光秀討たれたりと聞きて、萬五郎、舟を鹽津・海津に艤して、敦賀に落行かんとす。里人追詰めて、首を切つて秀吉に奉る。秀吉二日逗留して、尾張の清洲に赴く。丹羽五郎左衛門長秀、池田勝入も來る。瀧川左近將監一益は、關東より馳せ來る。柴田修理亮勝家は、越中國にして、長尾喜平次と對陣せしが、信長の事を聞きて陣を引拂ひ、京都に攻上らんとせし所に、羽柴秀吉、早光秀を討ちたりければ、同じく清洲に至り、秀吉長秀・勝入等と評議して、信忠信長の長男の息三法師を、信長の世繼とし、關國を分ち領す。信雄卿信長の二男には尾張國、信孝には美濃國、秀吉には丹波國、勝家には近江國長濱、池田父子には大坂・尼崎・兵庫、長秀には若狹國及び近江國高島・滋賀二郡、瀧川一益には五萬石、蜂屋出羽守には三萬石、是れ皆所領を加増せらるゝ所なり。三法師殿を安土山に移し、長谷川丹波守・前田玄以齋を、御守に附け、近江國にて、三十萬石を以て御厨料とす。三

法師殿御幼稚の間、信雄卿を御名代とす。此時柴田勝家、大に其心驕りて、物申す言葉も卑しく、聲を卷り、緩怠慮外多かりけり。傍輩に向ひても、猶斯の如し。丹羽長秀、竊に羽柴秀吉に呶きけるやう、公若し天下を従へんと思はゞ、勝家を斬るべしと。秀吉笑ひて曰く、我れ何故に、柴田に敵をなさんやと。其夜秀吉、夜もすがら寢ずして大息す。長秀怪みて問ふに、答へて曰く、我れ江州の長濱を、勝家から奪ひ取られし事を、口惜しく思ふなりと。斯くて各國に歸らんとす。勝家思はく、我を塞ぐ者は秀吉なりと。即ち軍兵を道に隠し、秀吉を殺さんとす。秀吉聞きて、殊道わき道より、美濃の長松を経て、長濱に至る。勝家は越前に歸らんとして、長濱を通らん事を恐れて、美濃の垂井に逗留す。秀吉聞きて曰く、我れ何故にか、猥に勝家を打つべき。必ず心を置く事なかれとて、次丸おつき丸秀勝とて、信長の末子なりけるを、秀吉之を養ひ置かれしを、人質に出さる。柴田、即ち秀勝を連れて、木本より越前に歸り給ふ。羽柴柴田の不和確執の始なり。

十月三日、秀吉を従五位下に敘し、右近衛少將に任ず。秀吉、即ち紫野の大徳寺に

して、信長公の葬禮を行はる。先づ一七日の法事を修せらる。鳥目一萬貫・白米一
千石を、大徳寺に送らる。杉原七郎左衛門家次・桑原次右衛門そよた・副田甚兵衛、之を奉
行す。同月十一日、轉讀の經あり。十二日、願寫施餓鬼、十三日懺法、十四日入室、
十五日闍維。其有様目を驚かす。奇麗を盡せり。金紗金襴を以て、棺槨を包み、金
銀を以て、軒欄を鏤め、沉香を以て、佛像を作りて、棺の内に置き、綾の白幕を四門
に張り、近國の武士警固辻堅、弓鏑鐵炮を立並べ、路の兩方に連なる事、既に一萬餘
人なり。羽柴小一郎秀長、之を奉行す。前輿は池田古新輝政、後輿は次丸秀勝之を
昇く、信長公の八男長丸おちやうまる信吉は、位牌を持つ。秀吉は、不動國行の太刀を持ち、即
ち太刀を大徳寺に送る。闍維の後、秀吉・秀勝焼香す。秀吉執奏して、一品相國を贈
り給ふ。五山の僧衆、残らず出仕あり。大徳寺に一字を建て、惣見院殿贈大相國一品
泰巖大居士の廟所とす。銀子千枚を、其經營とす。五十石を寺領とす。次日、鳥目千貫
を以て、太刀代
として、太
刀を返す。
秀吉、既に津の國の寶寺に、城を作らんとせられしに、遂に成就せずして寢みぬ。

十一月、織田三七信孝は、美濃國岐阜の城にありて、日本を從へて、天下の主あるじとなら
んと思ふ志あり。信雄卿を反きて、羽柴秀吉を打亡さんと企てらる。秀吉聞付けて
軍兵を集め、急に美濃の國に赴き、岐阜の城に取懸けて攻めらる。信孝、元より柴
田勝家と心を合せ内通あり。然れども越前は、雪深く降積みて、勝家更に軍兵を催
して、出づる事容易すからず。兎角する間に信孝、防ぎ守る事叶はずして、和平を
乞はれ、さまざま、詫事ありしかば、秀吉、さすが信孝を殺す事を、痛はしく思はれけ
れば、和睦して許し歸らる。

將軍記第十四終

將軍記第十五

豊臣秀吉記 上之二

柴田勝家は、越前にありて、秀吉の權威甚だ盛に成行く由を聞きて、大に妬み嫉む事、骨髓に徹りければ、瀧川左近將監一益を呼びて、密に相議りて曰く、羽柴秀吉、既に幼き主君三法師殿を、安土の城に居る置き、我身は管領執權して威を振ひ、後に天下を奪ひ取らんとする。其勢外に顯れ、己に従ふ者をば、近付け取立て、従はざる者をば、疎み退けて押倒さんとす。今若し誅せずば、天下の永き禍となり、悔むとも甲斐あるべからずとて、三七信孝に申して一味せしめ、先づ使を丹羽五郎左衛門長秀が許に遣して、此事をいはしむ。長秀が返事に、秀吉今三法師殿を守立て、後見をせらる。信孝之を嫌ひ思召すならば、三法師殿を岐阜へ迎取り給ひて、信孝

御後見ありて然るべし。されども三法師殿御幼稚の間は、様々の口説は絶ゆべからず。只能く御思案あるべしと申返しぬ。丹羽長秀常に思ふは、天下の事、武勇を以ていはし、柴田・瀧川に、誰か肩を並べん。然るを武勇に誇りて、仁義を知らず。主君を蔑にす。是れ羽柴筑前守秀吉は、武にして文あり。能く主君に禮節を行ふ。終には天下を取らん者なりと思へり。此故に、今定かなる返事をば、致さざりしなり。然るに秀吉の威勢、彌日を重ね月を越ゆるに従ひて、強くなる事、若草の生立つが如し。柴田勝家、此由を傳へ聞くに、胸塞がり腹悶えて、歎息をつき、大雪の降積るを見ても、拳を握り齒を切りて怒を含み、飛立つ計に思ひ乍ら、雪深ければ、軍を催す事もならで、只大雪を悪み暮す。瀧川謀りて曰く、北國の習ひ、十一月より二月迄は、雪深くして、軍用催し難し。此内に勝家と秀吉と和睦をなして、時を待ち給へかといふ。柴田尤なりというて、怒を押へて使者を遣す。小島若狭守・戸村文荷齋を以て、前田又左衛門利家・不破彦三・金森五郎八が許に遣して曰く、信長公の御事、未だ年を越えざるに、勝家と秀吉と、刃を研ぎ鏃を争はし、人の嘲、世の誹、

遁れ難かるべし。願はくは心を改めて、秀吉と諸共に、三法師殿を取立て申すべし。急ぎ京都に上りて、此由を秀吉に語りて給はらば、悦び入るべしとなり。前田不破・金森、即ち北の庄を立ちて長濱に至り、勝家が養子伊賀守勝豊に、斯くと語る。勝豊即ち三人と諸共に、長濱を出でて、攝津國寶寺に至り、富田左近將監を以て、秀吉に斯くと申入る。秀吉宣はく、勝家は、信長公の老臣なり。我れいかでか、其言に従はざらんやとて、即ち勝豊利家・不破・金森四人を召して、様々もてなさる。四人今は歸らんとして、議して曰く、秀吉の志、案に相違せり。定めて秀吉、此和睦の事、聞入れ給はじとこそ思ひしに、思ひの外に和ぎ給へり。然れども起請文なくしては益なしとて、又秀吉へ申入れて、逆もの事に、堅き誓約を給はらん。秀吉の曰く、我も斯く思ふなり。丹羽長秀・池田勝入等と談合して、各然るべしといはん時に誓言すべし。此趣を、勝家に語るべしとなり。四人即ち飛脚を以て、勝家に此趣言遣し、先づ信長の墓所に詣で、日を経て後、四人乍ら北の庄に歸る。勝家、即辛勞を謝して後、大に悦びて曰く、我れ羽柴筑前守を欺き濟したり。明年は時を待ちて、連

に任すべしと申されき。秀吉は、蜂須賀彦右衛門正勝・木村隼人に語りて曰く、此度勝家和睦の事、皆是れ我を欺く偽なり。我れ怠りて油断する所を、俄に來りて京を攻めん爲めなり。我れ能く之を悟り知りぬ。勝家等が智慮を以て、我を偽り欺かん事、蟻螂が斧なるべし。愚なる謀かなとて、大に冷笑ひ給ふ。

秀吉は、洛近き輩、畿内の諸大將の心を取らんが爲め、使者を諸方に遣して、志深く恩を厚くせられしかば、皆志を秀吉に通じ、如何なる大事ありとも、御用に立つべしと、各思ひ申しけり。又勝家方に親む者をば、色を立て、疎み隔て、ひたすら敵なりと思へる氣色なり。

秀吉、軍兵を率して、江州長濱に赴き、在家を焼拂ふ。柴田伊賀守勝豊、長濱の城を守る。秀吉思はく、勝豊は、勝家の養子ながらも、勝家及び佐久間玄蕃允盛政と、勝豊中惡しき事久し。されば長濱の城を攻落さん事は、いと易し。然れども勝豊に降參せさせんには如かじ。即ち勝家・勝豊の間、意趣あるの仔細條々を記して、勝豊が家老木下半右衛門・大金藤八郎・徳永石見守を呼びて、具に申聞かせらるゝに、三人な

がら、皆尤なりと同じて、城に歸りて勝豊に語る。勝豊も、日頃勝家に恨深き故に、其恨十七ヶ條を書立て、家人共に讀み聞かせ、此條々、我が非あらば申せといはれしに、家中一同に、是は君の御理なりと申す。さらば面々の心に任せよとあり。家人等、或は其儘勝豊に附従ふあり、或は父母妻子の越前にある者は、越前に下りて止まるも多し。勝豊と勝家、不會せし根元は、初め勝豊を養子に致し、其後勝家、又我が甥佐久間玄馬允盛政に、加賀二郡を與へて、之をもてはやし寵愛する事、勝豊に越えたり。盛政之に誇りて、彌勝豊を輕しめ侮る。故に勝豊、大に嫉み腹立つ。元日祝儀の時、一族皆集まりしに、勝家が盃を、先づ盛政に差す。勝豊大に怒りて、盛政が袖を引止め、勝豊進み出でて、盃を取りて飲む。勝家、盛政、如何ともすべきやうなし。是よりして、勝豊既に勝家を恨み盛政を惡む。勝家彌勝豊を疎みて、其外様々不義の所爲あるを以て、勝豊、只今秀吉に屬す。

十二月廿三日、秀吉、即ち安土に至りて、三法師殿に、歳暮の御禮申して、小袖十重、銀子千兩を奉らる。秀吉又小袖五重、銀子百枚、樽十荷づつ、諸大將に送り、其家老

方にも、小袖二重づつ與へらる。

同十一年正月元日、秀吉、播磨の姫路に赴き、二日に、酒肴、銀子、八木等を諸侍に給はりて、春の始を祝ひ給へば、侍方大に悦び、面々酒宴遊樂を致せり。然れども秀吉は、更に休息もなく、右筆三人を召して、年々の恩祿、太刀、小袖、八木等の費を記させ、算用者十人に勘定せさせ、其後朝飯を食して臥し給ひ、三日の午刻計りに眠覺めて、氣色新に付きて、鬼とも組まんと思へる體なり。斯くて諸士の御禮、神主僧法師等の禮、さても残らずうけ給ふ。

七日、秀吉上洛參内。次の朝、大津に至り、舟にて其夜安土に赴き、九日に、正月の御禮を、三法師殿及び信雄卿へ申して、五日逗留し、柳瀬渡りを見巡りて歸り給ふ。秀吉思はく、雪未だ消え盡さぬ内に、先づ瀧川一益を打ちて、勝家に氣を失はせんとして、諸軍勢に觸巡らし、我れ北伊勢に軍を思立ちたり。各早く近江の草津に出でて、相待つべしとなり。諸軍我もくと、悉く草津に集りて、秀吉を相待ちけり。

廿三日、羽柴筑前守秀吉、軍兵一萬五千を率して、草津に至り、諸軍勢を集めらる、

に、都合七萬餘騎、之を二手に分つ。一手は、羽柴美濃守秀長・筒井順慶・伊藤掃部助・氏家左京亮・稻葉伊豫守を大將として、二萬五千餘騎を、土岐多羅口へ差向け、一手は三好孫七郎秀次・中村孫平次等を大將として、二萬餘騎を、君畑越に遣し、一手は、羽柴筑前守秀吉、自ら三萬餘騎にて、安樂越に懸り、岩石谷峯をもちはず押寄せらる。瀧川一益も、聞ゆる武勇智謀の名大將なれば、軍兵を分つて之を防ぐ。秀吉軍を進めて、桑名邊を燒拂ふ。瀧川怒りて曰く、我れ既に軍兵を分つて、方々を防ぐ故に、手勢僅にして、防ぐ事能はず。桑名を燒拂はれける事の口惜さよとて、齒を切りて、躍り上りく腹立ちけれども、すべき様なし。小勢を以て大敵を崩すには、夜討に如くはなしとて、日の暮るゝを待つ所に、秀吉、軍兵に仰せけるは、瀧川も、武略の老いたる者なり。夜討すべき事、案の内なり。怠る事なかれとて、大籌夜廻厳しくせられければ、瀧川が謀、相違しけり。

羽柴小一郎秀長・三好孫七郎秀次は、軍勢を調べて、瀧川一益が甥に、瀧川義太夫といふ者の籠りし嶺の城に押詰め攻戦ふ。佐治新助が守る所の龜山の城は、秀吉の

先陣取巻き、閏正月廿六日の早朝に押詰めて、柵を破り塀を乗り、金堀を以て、坤の矢倉を掘崩し込入らんとす。城中も、命を捨て、防ぎ戦ふ。瀧川一益聞きて、方便りて退くべしと言遣しければ、佐治は降人になりて城を渡し、長島へ退きたり。義太夫も、防ぐべき力なく、城を開退きけり。秀吉、即ち關安藝守・木村隼人・一柳市介直末・山岡美作守景隆等に仰せて、伊勢を守らしめ、二月に、秀吉は、長濱に赴かれたり。

柴田修理亮勝家は、佐久間玄蕃允盛政を大將として、二萬餘騎を差添へ、木下邊に押出す。盛政、即ち諸軍勢と軍評定しけり。前田孫四郎利政、前陣を望みて打出でしに、不破彦三・佐久間久右衛門安次・原彦次郎金森五郎八、續きて押出す。大將盛政、後陣として進み、軍兵を諸城に置きて、押として守らしむ。斯くて柳瀬に陣を取る。

秀吉此由聞きて、長濱を立ちて、志津嶽の邊に至り、軍を十三段に分けらる。中にも堀久太郎秀政を一番とし、柴田伊賀守勝豊を二番とし、中川瀬兵衛清秀を、三番と

し、秀吉其跡に進みて、佐久間玄蕃允盛政と對陣あり。兩陣の間、僅に十町計りには過ぐべからず。されども只足輕少々出して、鐵炮打合ひつゝ、其日は、兩陣相引にして止みぬ。

次の日未明に、秀吉は、足輕の眞似して、古老の勇士十餘騎を召連れ、嶺に上りて、敵陣の體を見て歸りて曰く、此軍、急に打つべからずとて、群兵をして諸城を守らしめ、要害を堅くして、四月朔日に、秀吉は長濱に歸らる。

柴田伊賀守勝豊は、本山の砦に籠め置かれしが、病氣起りて、日に從ひて重くなりければ、養生の爲め京に上る。勝豊、即ち我家臣山路將監といふ者を、城中に残し置きたりける所に、山路既に心替して、城中一方の軍將に、木村小隼人といふ者を殺して、柴田勝家が軍兵を、城に引入れんとす。勝豊が舊臣に野村勝二郎返忠して、此事顯れければ、山路將監は落失せたり。木村小隼人、大に驚き怒つて、山路が母並に妻子以上七人を捕へ、秀吉の命に依つて、磔にかけたり。

織田三七信孝は、舊冬秀吉と和睦ありしを、又其約を違へ、柴田勝家瀧川一益に内通して、軍兵を催し燒拂はる。秀吉聞きて、長濱を打立ちつゝ、濃州大柿に赴きて、急に三七殿を攻めらる。

山路將監は、佐久間盛政が陣中にありしが、盛政に告げて曰く、秀吉既に美濃に赴く。是れ三七殿御心替りありて、柴田勝家殿に一味し給ふ故なれば、此度後詰して、秀吉を打退け、三七殿を救ひ給へかしといふ。盛政が曰く、我も斯く存すと雖も、大山を隔て、難所なれば、是より容易く軍勢を出し難し、力なき事なりと。山路重ねて私語きけるやう、敵の要害丈夫にして、何れの城も詰寄せ難し。但余語の湖の傍は、中川瀬兵衛清秀が陣として、要害も疎に、味方の諸城を遠く離れたり。謀は不意を打つに如かず、急ぎ中川が陣を打ち給へかしといふ。盛政實にもと思ひ、勝家に告げたり。勝家も、然るべしと思ひて曰く、さあらば我軍兵をも差添ふべし。前田利家・利長・原彦二郎・安井左近等を以て、敵陣に對して守らしめ、盛政は、急に中川が陣に詰懸け、軍終らば、早速に引歸るべし。構へて滞りて、遅々すべからずといへり。盛政うけがひ、一萬餘人を率して、余語の入湖の邊に至る。不破彦三・徳山

五兵衛・佐久間久右衛門安次、先陣なり。中川瀬兵衛が兵、己が馬に水を飲ふとて、湖の邊に出でたるを、盛政が軍兵駈寄せて討たんとす。彼者逃歸りて、中川に斯くと告げたり。清秀と高山右近、其勢六千餘騎と、不破彦三・佐久間久右衛門と、大に戦ふ。盛政は、軍兵一千餘人を分けて、城の後に廻し、城下の家に火をかけ焼立てしに、中川・高山が軍兵、度に迷ひて亂れしかば、高山右近は逃落ちて、美濃守秀長の木本の陣に駈入りたり。中川瀬兵衛、一命を捨て、防ぎ戦ふ。斯くて城中僅に六百餘人、漸く引色になりしかば、北國勢、勝に乗りて攻上る。瀬兵衛、小姓馬廻五六十人にて、突いて出でつゝ、追出し攻入りけり。寄手の大勢、新手を入替へく攻めしかば、城中の兵、或は討たれ、或は痛手負うて、残り少なくなりしかば、詰の城に引上る所に、寄手聲々に呼ばはりけるは、如何に中川殿、きたなくも敵に後を見せ給ふ者かな。引返して勝負あれかしといふ。瀬兵衛、いと無念にや思ひけん、心得たりとて、鎧取直し、近づく敵五六人突伏せたり。佐久間玄蕃允が郎等に、近藤無一といふ者に組まれて、中川瀬兵衛討たれば、城は終に落ちたり。盛政大に勇

中川清秀
討たる

み誇りて、清秀が首を、柴田が許に送り遣す。勝家甚だ喜び、急ぎ其陣を引取りて歸れと、使を立つる事五六度に及ぶと雖も、盛政更に歸らず。猶此所に陣取りて控へたり。

盛政等大勢にて、中川瀬兵衛を攻むる事急なる由、秀吉聞き給ひ、大柿には、軍兵を殘し置きて、自ら美濃より、直に志津嵩・柳瀬の邊に赴き給ひしかば、日既に暮方になりぬ。軍兵一萬五千餘騎、藤川に着く所に、村里の百姓等、松明手毎に取持ちて奉る。長瀬の者共は、酒肴・餅・赤飯・馬秣・糠・藁山の如く持出でて、秀吉に參らせたり。秀吉大に悦び、滯る事なく志津嵩に着きて、城毎に人を遣し、柳瀬表に出づべき由を相觸れらる。丹羽五郎左衛門尉長秀は、江州坂本の城を出でて、志津嵩の城に入りたり。

佐久間盛政等は、遙に押來る敵陣の松明夥しきを見て、すはや羽柴筑前守秀吉、大軍にて寄せ來るといふ程こそあれ、陣中亂れ騒ぎて、急ぎ引拂はんと犇きたり。原彦次郎・安井左近を殿として、引きける所に、秀吉の先陣押詰めて戦ふ。盛政は、一

萬五千餘騎を率して、志津嵩の北なる嶺に取上りて、使を柴田三左衛門勝政が許に遣す。勝政、三千餘騎にて馳せ來り、盛政と一つにならんとするに、秀吉の大軍進み來りて、鐵炮を打懸け矢を放つ事雨の如し。勝政防ぎ兼ねて、軍兵亂れ傾く。秀吉、即ち軍兵を勇めて打たしめらる。福島市松正則、一陣に進み、首を取りて秀吉に奉る。加藤虎助清正、同じく孫六嘉明・平野權平長泰・脇坂基内・安治・糟屋助右衛門・石川兵助・片桐助作・直盛以上七人、鋒きつさきを揃へて進み戦ふ。世の人之を柳瀬の七本鎗と名づく。佐久間玄蕃允盛政は、拜郷五左衛門を招きて曰く、先陣既に傾き立ちて亂れたり。汝いかにも計らへといふ。拜郷畏りて引返す。淺井吉兵衛・山路將監・宿屋七左衛門、同じく返し合せけるが、拜郷真先に進み、石川兵助と渡し合せ、諸共に討死す。秀吉の軍兵、勝に乗りて、敵を追懸くる。盛政は、軍勢を麾く。原次郎が曰く、敵勢は彌重なりて、谷より上り、峯に集る事雲霞の如く、味方は、風の誘ふ枯葉にて、後崩すべしと見ゆ。只願はくは一合戦あれかし。秀吉、假令何十萬騎なりとも、某先陣すべしといひけれども、盛政更に用ひず。案の如く秀吉の軍勢は、見

佐久間盛
政敗軍

るが内に夥しく集り重なりしを、盛政が軍兵共、驚き恐れ、後崩して亂れ騒ぐ。丹羽五郎左衛門長秀、此由を見て、時分は今ぞ、懸れくと呼ばはり、鬨を作りて押懸る。北國勢の後陣既に亂れて、散々になりしかば、玄蕃允盛政も、惣敗軍になりて、柴田三左衛門勝政討死す。

柴田修理亮勝家は、盛政が敗北せし事を聞きて、大に怒りて曰く、余語の陣を急ぎ引取れと、使を立てしは爰の事なり。軍法に闇き故に、斯く敗軍はせしなり。さらば我れ一軍せんとして、軍兵を點檢するに、皆落失せて、僅に三千餘騎には過ぎず。されども勝家は、勇氣更に撓まず。よし／＼弱き奴原、臆病神の付きたらんは、足纏になるものぞ。軍の習ひ、勢の多少に寄らず、只軍兵の志を一になすを以て、敵をば打靡くるものぞかし。進めや者共と勇むれども、残り止まる軍勢共、いと不興の色あり。爰に毛受勝介諫めて曰く、味方の天運既に傾きたり。縦ひ戦ふとも、功をなす事あるべからず。雜兵の手に懸りて討たれ給はんは、口惜しかるべし。只願はくは北の庄に引籠り、御自害あるべし。某御諱を犯し奉り、敵を防ぎて討死せ

んといひければ、勝家實にもと思ひ、大に其忠義を感じ、我に忠あらん輩は、勝介に與せよとて、北の庄に歸られたり。既に秀吉の軍勢、頻に追ひ來りて攻め懸る。毛受勝介は、待設けたる事なれば、少しも騒がず、相從ふ軍兵三百餘騎を、左右に立てて名乗りけるは、此年頃、天下に隠れもなき、鬼柴田といはれし修理亮勝家爰にあり。首取つて高名せよとて突いて出づる。勝介が兄に毛受茂左衛門尉、同じく一所に相戦ふ。敵軍開き靡きしかども、新手入替り攻合ひければ、三百餘人の者共、或は討たれ或は手負ひて、残り少なくなりければ、今は是迄なりとて、毛受兄弟腹搔切つて臥したり。

柴田勝家は、越前の府中に來り、前田父子に對面し、年來軍功の苦勞を一禮して、湯漬を食し、酒飲みて快く笑ひて立出でつゝ、北の庄に歸り、柴田彌右衛門尉・小島若狹守・中村文荷齋徳庵・同與左衛門尉・松平甚五兵衛尉等を召集め、城中の手配をせさせらる。

秀吉、既に透間なく、堀久太郎秀政を先陣として追行く程に、其日の暮方に府中に着き、脇本邊迄、錐を立つる空地もなく、軍兵轟と陣取りたり。軍法の掟を陣中に觸廻し、明方の暗紛れに、城を取巻きけるを、城中より鐵炮を以て打出すに、寄手多く討たれけり。

柴田權六・佐久間玄蕃允盛政は、志津嵩敗軍の後、賀州に落隠れたりしを生捕りぬ。秀吉、即ち山口甚兵衛・副田甚左衛門に預け置かる。城中此由聞きて、彌勢力を失ふ。夜に入りて勝家は、城中の一族他家の軍士を集め、酒宴を始め、數盃を傾けて曰く、我れ既に藤吉猿面郎に亡さるゝ事、其恨淺からず。明日は早や浮世の隙を曙の雲となり、黄泉の鬼客とならん。今夜酒飲みて、人間世の思出にせんとして、數刻を移しける所に、夜既に明けしかば、四月廿四日、殿主に火を懸け、妻の小谷殿信長公の妹なり以下男女三十餘人、一時の煙と上りつゝ、城は焦土の野原となりたり。

廿六日、秀吉、夫より賀州尾山に至り、前田利家に、石川・河北二郡を給はり、金澤の城を守らしめらる。利家は、柴田勝家に與せし人なれども、其上秀吉と、別魂の志を通せられし故なり。越前・加賀の内能美・惠那の二郡を、丹羽長秀加増あり、越前

守になさる。此度軍功の勸賞なり。

秀吉、美濃に赴き、織田三七信孝の岐阜の城を取圍まる。信孝は、勝家を後詰の便に頼みてこそ、謀叛の色は立てられけれ。柴田既に亡びしかば、城中の軍兵落失せ、力弱く成行きたり。信雄卿は、尾州の軍勢を率して、同じく岐阜の城に押寄せ、使を遣して曰く、早く城を出でて、尾張に来るべしと。信孝、即ち城を出でて舟に取乗り、知多の宇津美に至らる。信雄卿の郎等に、中川勘右衛門といふ者を遣して、信孝に自害を勧めければ、力なく腹切つて死せらる。

織田信孝
自盡

五月三日、秀吉、既に江州坂本に歸陣あり。諸將軍士、皆端午の祝儀申す。淺野彌兵衛長政に仰せて、佐久間玄蕃允盛政、柴田權六を京都に引渡し、六條河原にして首を刎ねらる。佐久間盛政大音聲を上げ、諸人に向つていふやう、我れ此程、余語の湖の要害にして、中川瀨兵衛を打取りける所に、勝家の下知に任せ、軍勢を引取らば、いかでか斯る事に及ばんや。軍功に誇らずして、戦克らなば、秀吉を殺さん事、今斯くの如くすべきものといふ。聞く人、大に其勇氣の怯れざる事感ず。斯く

佐久間盛
政誅せら
る

て盛政、權六誅せらる。瀧川左近將監一益は、さしも武勇の名高く、世の人恐れ重んじけるが、信孝勝家に心を通じて一味せし所に、信孝勝家皆亡びしかば、力を失ひ勢衰へて、降人に出でられたり。秀吉、年來の好を思ひ宥め許して、越前の國大野といふ所に移して住ましめらる。威力盡き果て、幽なる有様、其上にも似ず。老驥繋がれて、槽櫪の前にあるが如し。

七月朔日、秀吉既に加藤虎助清正後に主計頭と號す。又、肥後守になされし。加藤孫六郎嘉明後に左馬助と號す。福島市松

正則後に左衛門大夫と號す。脇坂甚内安治後に中務大夫と號す。平野權平長泰後に遠江守と號す。片桐助作直成後に東市正と號す。糟

屋助右衛門後に内膳正と號す。右の六人に、軍功の賞を行はる。其上僅に二百石の祿をうけし

に、今各五千石を給はる。俄に富貴に至る事、諸軍士皆羨みつゝ、彌軍忠を勵まさん事を思へり。柳瀬表の七本鍵にて、石川兵助、一陣に進みて討死す。若し命あらば、其第一に賞せらるべし、惜いかな。

秀吉、既に城を攝州大坂に築き給ふ。此年參議に任じ、從四位下に敘す。

同十二年の春、信雄卿、既に秀吉の威勢に誇る事を妬みて、亡さんとする志あり。

信雄秀吉
相戦ふ

然るに信雄卿の家臣に、松島の城主津川玄蕃允・星崎の城主岡田長門守・刈安賀の城主淺井田宮丸、皆武勇の譽、世に高し。秀吉深く志を厚くして睦びちなみ申されしを、信雄卿に讒言する者あり。此三人、秀吉と心を合せて、君を傾けんとする企ありといふ。信雄卿、疑を起して、長島の城に召寄せて、三人ながら殺されたり。星崎の城に此由聞きて、長門守が弟勝五郎大に怒り、軍兵を集めて楯籠る。信雄卿、つらく心に思はく、秀吉定めて此事を怒り、我に向つて旗を靡かし弓を引かんと。此故に、使者を東照大権現の許に遣して、平に頼む由仰せらる。権現大にうけごひ給ふ。又使を、池田勝入・森武藏守長一に遣して、一味せらるべきの由頼まれたり。是より先に秀吉より、尾藤甚右衛門を遣して、懇に禮儀を盡されけり。池田勝入、何れの方に、與力同心すべしとも思ひ定めず。片桐半右衛門に語りて曰く、我れ年久しく、信長公の恩を蒙りぬ。今は信雄卿に與して、恩を報せんと思ふは如何にと。片桐が曰く、誠に義の道を立つべくば、仰にや及ぶべきと。其時伊木清兵衛、進み出でて曰く、某、彼の秀吉の有様を聞及ぶに、是れ天下の大器量ある人なりと

覺えたり。只同じくは、秀吉に従はんはんに過ぐべからず。是れ身を全うし國豊にして、子孫の爲め家榮えん。若し信雄卿に従はば、身危くして國失はれ、子孫亡ぶるに年を越ゆべからず。假令恩を思ひ義を守るといふとも、家亡ぶるに至りては、子孫絶えて、名を埋もらさん。君能く思案あるべしと申す。勝入、猶も志を思ひ定めず。然る所に秀吉の方より、津田隼人を使として曰く、美濃・尾張・三川三ヶ國を領知あるべし。此事已後迄も違ふべからずと、誓言を以て申越さる。勝入彌心惑ふ。伊木清兵衛、強く諫めて勧めける程に、勝入終に秀吉に付かれたり。片桐半右衛門、之を嘲り笑ひて曰く、義に背き恩を忘るゝ人なり。我更に勝入に従はじといふ。森武藏守長一も、秀吉に一味しけり。

東照大権現、軍兵を率して、尾州の清洲に至り、信雄卿に對面して、秀吉縦ひ攻め來るとも、防ぎ退けん事、掌の内になり。君御心を痛ましめ給ふ事あるべからずとなり。尾州犬山の城は、信雄卿の家臣中川勘右衛門之を守る。中川、既に信雄卿の勢州長島の城に赴き、軍の相圖手賦を定めて、歸る道にして、池尻平左衛門出合ひて、

家康、信
雄を援く

兩人共に討死す。

犬山の城に、大將なくなりける事を、池田勝入聞きて、犬山の里人を招きて、城の要害能く聞濟して、紀伊守之助と、軍兵を一に合せて、犬山の城に押寄せ、急に攻落さんとす。中川が叔父清藏主、大に戦ひて討死す。勝入終に犬山を乗取り、猶進みて、小牧山の近邊に至り、在家を焼拂ひて、早々引取りぬ。

大権現は、信雄卿と清洲の城におはして、小牧邊に火ありと聞き給ひ、是れ必ず池田勝入が働きけるならんとて、軍兵を率して打向ひ給へば、勝入は、既に兵を入れて、引取りける跡なりければ、空しく立歸る。夫より又軍兵を調べて、犬山の邊に赴き、森武藏守長一が羽黒に陣取りて居たるを見て、酒井左衛門尉忠次・奥平美作守勝昌・松平紀伊守家信等五千餘騎を差向けて、森長一と戦はしめらる。長一、打負け、て敗軍す。池田勝入父子・稻葉伊豫守・子息右京亮等軍兵を率して、犬山に軍立し、長一が敗北せしと聞きて、進みて戦はんとす。或古老の兵、勝入が馬を控へて曰く、敵軍既に勝に乗りて勇む。我等進みて之を討つに利あるべからず。只待受けて戦

は、利あるべしと。稻葉伊豫守が曰く、我れ先陣して敵を討つべし。敵は疲れて、味方は新手なり。勝つべき事眼前にありとて、鎧打振り曰く、老の波を、血の川に湛へんものと勇みければ、諸軍聞きて大に笑ふ。

勝入が軍兵押來るを、大権現見給ひて、新手の大勢に駈合はん事、味方の勞軍勝に誇らば、是れ必ず敗を取るの端なりとて、兵を引きて歸り給ふ。勝入等、大権現の弓矢の締りたる事を感じて、同じく又引返す。榊原小平太康政進み出でて、小牧山を陣所とせんと申す。大権現許し給ふ。信雄卿、同じく小牧山におはします。兼て蟹清水・外山村・宇田津村等の砦を修理し、小幡の古き要害を築きて、兵を置きて守らしむ。

秀吉此由聞きて、尾藤甚右衛門が許に、飛脚を立て、言遣されけるは、敵兵縦ひ合戦すべしと犇くとも、必ず夫に立合うて、兵を出すべからず。池田勝入・森長一は、武勇の名に矜りて、敵を侮る癖あり。汝堅く之を止めよと言遣されたり。

秀吉既に大坂を立ちて、犬山に赴かる。軍兵十二萬五千餘騎なり。斯くて犬山に至

りて、夫より樂田がくでん・羽黒の邊に押付け、小牧山の敵陣に對して、多く子城を構へ、二重堀の城には、日根野備中守弘就・舍弟次右衛門、二千餘騎にて守らしめ、岩崎山の城には、稻葉伊豫守・子息右京亮貞通等四千餘騎、小松寺の城には、丹羽五郎左衛門長秀八千餘騎、青塚の城には、森武藏守長一三千餘騎、内窪山の城には、蜂屋出羽守頼隆・金森五郎八三千餘騎、其外村々嶺々、皆陣所として、軍兵さながら雲霞の如し。四日に、池田勝入、其家老軍士を集めて議して曰く、敵兵大半は小牧山にあり。我れつらく思ふに、三河國は、軍兵残りなく出でたる跡なれば、國中には、手向ふ者あるべからず。此時を窺ひ、三河に亂れ入りて、國中の村里在々所々を燒拂はし、小牧山の敵軍共驚き騒ぎ、故郷の妻子の事を歎かん。然らば敗北すべき事、掌を指すが如くなるべしと。家老の臣等尤なりと一同す。勝入頓て犬山に行きて、秀吉に語りければ、秀吉も甘心あり。さらば明日東三河に赴き、在々を燒拂ひ、篠木・栢井に城を構へ、兵を入れて守らしめ、敵國に夜打を致しなば、敵必ず惑ひ恐れて退屈すべし。敵を侮る事なかれ、備を亂して進むことなかれとて、勝入を返されたり。

秀吉又、増田仁右衛門長盛を以て仰さるゝは、池田勝入、軍兵を三州に進む。三好孫七郎秀次一萬餘騎、堀久太郎秀政五千餘騎、其外、兵を加勢して勝入を救ひ、勝入が下知に従ふべしとて、勝入父子にも此趣を言遣され、秀吉又犬山を出でて、樂田に陣を居ゑらる。斯くて池田勝入・子息紀伊守之助・森武藏守長一・三好孫七郎秀次・堀久太郎秀政、各軍兵を率して、篠木・栢井に至り、參州の地に押入らんとす。篠木の代官より、小牧山に告げ來る。

東照大權現、此由聞き給ひ、酒井左衛門尉忠次・石川伯耆・本多平八郎忠勝等をば、小牧に止めて陣を守らしめ、大須賀五郎左衛門康高・榊原小平太康政・本田彦次郎康重・水野惣兵衛・丹輪勘助氏次を以て先陣として、小牧山を打立ちて、長久手の邊に至らしめらる。軍兵都合四千餘人なり。次に又、本田豊後守廣孝を以て、龍泉寺の邊に赴きて、敵陣の有様を見せしめらる。斯る所に池田勝入等、即ち丹輪勘助が岩崎の居城を取巻きて攻むるに、甚だ急なり。勘助が弟次郎助、防ぎ戦うて討死せしかば、城落ちたり。勝入大に喜ぶ。此時に當つて、東照大權現は、小幡に至り給ふ。大須

賀康高・榊原康政・本田康重・水野惣兵衛・丹輪勘助と、三好秀次と相戦うて、大に打破る。秀次叶はずして落行く。康高・康政等、勝に乗つて追懸けつゝ、長久手邊に至る。秀次が郎等に、田中久兵衛といふ者、堀久太郎秀政が陣に馳せ來りて曰く、三好秀次、只今敵軍と戦うて、大に打負けられたりと。其詞未だ終らざるに、秀政眼を瞋らかし、大に叱りて曰く、汝は何とて、愚なる事を申來れるや。我れ推量するに、汝更に軍の事を、我に知らせん爲に、來りたるにてはあるべからず。軍の恐しさに逃げ落ちて來れるならんと、恥しめられて、田中久兵衛赤面して物いはず。少頃ありて、敵兵押來りて、田中を討たんとす。田中が曰く、我れ先づ三好秀次に問ひて後に、軍をばすべきぞやとて、鞭笠を合せて、跡をも見返らず逃去りぬ。諸軍大に笑ふ。堀久太郎秀政、此由を見て、軍を調へ備を立て、相待つ所に、大須賀康高・榊原康政等、秀次を追ふ事一里計にして、堀久太郎秀政、横合より突いて懸るに逢うて、大須賀・榊原等、靡き亂れんとす。本田彦次郎康重、爰を破られては大事なりとて、命を捨て、戦うて、痛手薄手七ヶ所を蒙りぬ。敵もさすがに戦ひ疲れて、兩方に引分

れたり。

池田勝入、其子紀伊守・森武藏守、軍を進めて押來る。東照大権現、其寵臣井伊萬千代直政後に兵部と號す等四千餘騎を率して、長久手の巽の方の山に繰出し、三手に分れて備を立て、弓鐵炮を亂れ放つ事雨の如し。池田・森が軍兵打立てられ、馬の足を居る兼ねたり。森武藏守長一、眞先に進みて、駈亂さんとする所に、鐵炮に眉間を打碎かれ、馬より逆に落ちて死しければ、諸軍大に亂れ、勝入が軍兵も散々ちぢぢになりて、備を崩しけり。勝入が郎從秋田加兵衛・梶浦兵七郎・片桐與三郎・竹林小平太、既に勝入が討たれんとするを見て、返し合せて、萬千代直政が軍兵と、防ぎ戦うて討死す。永井傳八後に右近と號す直勝、生年廿二、自ら鎧を取りて勝入と戦ひ、終に勝入を突伏せ、首取つて差上げたり。安藤彦兵衛直次後に帶刀と號す、池田紀伊守之助と渡り合ひて、之助終に討たれたり。池田丹後守は、之をも知らずで戦ひしが、勝入之助等、皆討たれたりと聞き、頓て落ちて歸る。是に於て大権現と、信雄卿の軍兵を一手になして、逃ぐるを追ふ事甚だ急なり。追打に敵の首數多取りて、勝鬨をあげて引返し給ふ。是れ

本田佐渡守正信・内藤四郎左衛門正成が、諫めける故なり。秀吉、大軍の新手にて備へたり。勝に乗りて長追をせば、味方疲れたる軍兵なり。必ず大なる後れを取るべし。只是より返し給へと申しければ、實にもとて、則ち小幡の郷に引返し給ひけり。秀吉、既に勝入父子・長一以下討たれたりと聞きて、樂田を打立ちつゝ、備を立て、龍泉寺に着き給ふ。木村小隼人・二柳市介直末等、馳せ付きて從ふ。直に長久手に進みて、戦はんとせらる。敗軍の者共來りて、大權現・信雄卿、皆引返し給ふといふ。秀吉の曰く、我れ勝入を戒めて、汝必ず敵を侮る事なかれ、勝に乗りて誇る事なかれといひし言葉を用ひずして、今斯くの如し。口惜き事かな。是より小幡に赴き、大權現と一戦を遂げ、勝入・長一が弔軍にせんとて、馬を進めらる。稻葉伊豫守等、馬の口に取付きて諫めけるは、日既に暮方になり、敵又引籠れり。味方の利を失はん事疑なし。軍は今日に限るべからず。先づ引入り給へと、諸軍一同に申しければ、秀吉、怒を押へて歸り給ふ。此時本多平八郎忠勝、僅に二三百人計を率して、秀吉の大軍と四五町を隔て、打並びて、小幡に行く。秀吉の先陣、之を討たんといふ。

秀吉許し給はず。忠勝更に恐れたる色なし。勇氣彌武くして、終に小幡に至る。世の人、ほめぬ者なし。和睦ありて後に、秀吉大に平八郎をほめて曰く、忠吉が武勇、其分量を知り難し。然れども長久手の歸るさに、小勢を以て、我が大軍に打並びて行ける事は、武勇の氣、甚だ常の人に過ぎたりと、大にほめ給ふ。聞く人皆羨み思ひけり。

石川伯耆守は、大權現股肱の臣なり。然るを志を秀吉に内通せしかば、酒井左衛門尉忠次、之を見咎めて、其裏切せんかと危みて、秀吉の軍を討たずして引退き給へり。秀吉、既に犬山の坤の方に當りて、奈良・高田といふ所に城を構へて、長谷川藤五郎秀一・稻葉右京亮真通を以て守らしむ。

秀吉、羽黒の舊壘を築きて、山内猪右衛門・伊藤掃部助・堀尾吉晴を居ゑて守らしめ、小牧山に對して、子城十餘ヶ所を構へて、美濃國戸島に至りて、羽柴小吉を居ゑて城主とす。

秀吉、軍兵六萬餘騎を率して、青塚の邊に至り、二重堀の砦を取拂ふ。木村常陸介、

神子田半左衛門・小寺官兵衛・明石左近、猶之を守る。敵兵襲ひ來りて、打退けんす。細川越中守忠興が兵、之を破る。其夜秀吉、即ち神子田半左衛門を召して曰く、今日の軍に、汝いかなれば、戦に力を盡さると。神子田が曰く、手の軍兵少き故に、心の儘に働き得ずといふ。秀吉怒りて曰く、汝初め我に屬する時は、郎從僅に十人にだも足らず。今の手の者は、其上より多き事、何増倍ぞや。夫に人數少しとて働かざるは、心あるかとして、秀吉、夫より神子田を疏み惡みて、後に終に打殺されき。

五月、秀吉、既に堀久太郎に、樂田を守らしめ、加藤遠江守に、犬山の城を守らせ、秀吉自ら美濃に赴き、富田の寺内に陣を居ゑて、加賀野井彌八郎が守る所の城を攻めらる。信雄卿、此由聞きて、千草三郎左衛門・濱田與右衛門・小泉甚六・楠十郎・林與五郎・其子十藏・小坂孫九郎、其兵二千騎を遣して、加勢せらる。秀吉急に攻めつけらるゝに、城中怵へずして降參す。秀吉更に許さず、いよゝ急に攻められしかば、城中大に困む。一日大雨降り暮しけるに、夜に入りて城の兵共、門を開きて打つて

出でんとす。秀吉の兵相向ひ、一人も洩らさじと攻め戦ふに、突崩しゝ逃げ落つる。跡に後るゝ者は、皆打殺され生捕らる。千草三郎左衛門・林十藏・加藤太郎右衛門は討死す。楠十藏は生捕らる。淺野彌兵衛長政、之を申宥めて、命を助けんとす。秀吉うけがはず、終に首を刎ねらる。

秀吉軍兵を進めて、竹鼻の城を攻めらる。城主不破源六、之を防ぐ。秀吉は、城の體を察して、四方に長堤を築き、木曾川を堰入れらる。水既に城を浸し、蛇・蛙・鼠數百千集まる。源六降參す。秀吉許して城を取り、一柳市介直末を、城主として居ゑらる。夫より多藝に赴き、直江村に砦を構へ、丸毛三郎兵衛を居ゑて、後に大垣に歸らる。

瀧川左近將監一益は、柴田修理亮勝家亡びて後は、越前に隠れ居たるを、秀吉、其武勇の名高き事を惜みて、伊勢の神戸に居らしめらる。瀧川一益、此程秀吉と信雄卿と、軍に取結ぶと聞きて、尾州蟹江の城主前田與十郎に、使を遣して曰く、必ず忠節を、秀吉に盡さるべし。然らば家門の爲め宜しかるべしと。前田之に従ふ。瀧川一

益は、九鬼右馬允嘉隆と共に舟に乗りて、蟹江城に入りたり。大権現・信雄卿、此由聞きて、軍兵を率して蟹江の城に取懸け、急に之を攻めらる。酒井忠次・榊原康政、大に軍功を勵ます。瀧川一益防ぎ兼ね、力盡き果て、前田與十郎が首を切つて降人に出でたり。一益、夫より伊勢に歸りけれども、比興の爲なりと、諸人笑ひ嘲りしかば、恥かしく思ひて京に上る。爰にも足をためず、丹波に逃下りぬ。秀吉は、蟹江の軍を聞きて、瀧川を救はんとて、大垣を立ち給ふ。一益城を落ちたりと聞きて、秀吉直に京都に歸り上る。大権現も遠江に歸り、小牧の城には、榊原康政を残して守らしめらる。

秀吉、又伊勢に赴き、羽津に陣取り、信雄卿も、長島・桑名に陣取り給ふ。

秀吉、既に富田左近・津田隼人に語りて曰く、我は信長公の大御恩を、雨山に蒙りし事、言葉に盡し難し。斯くて明智日向守光秀を誅罰す。信長公定めて、眉を黄泉の底に開け給はんものをや。夫に信孝・信雄、皆我を怨みて、殺さんとし給ふ。是何事ぞや。されども我れ已む事を得ずして、軍を出して之を防ぐ。是只身の難を遁れんが

爲なり。更に我が本意にはあらず。信孝は運盡きて、既に死し給ふ。我れ今願はくは信雄卿と和睦せん事を思ふ。此事叶は、我身の喜、何事か之にまさらん。汝達能きやうに相計らはれよとなり。富田・津田、深く感じて涙を流し、即ち桑名の陣に行きて、信雄卿に申入れしかば、此上は和睦あるべきと仰あり。兩人喜びて立歸りければ、秀吉も甚だ喜び給ふ。

十月廿日、矢田川原にして、秀吉と信雄卿と、和睦の對面あり。秀吉大に愼み、手を束ねて膝を屈め、涙を流して、暫く物申されず。斯くて御太刀を獻じて、秀吉立歸らる。是より兩陣の諸軍、萬歳を謠ひ、大に喜び合へり。秀吉、即ち犬山の城を、信雄卿に返し給ふ。

十一月廿二日、秀吉を權大納言に任じ、從三位に敍す。此年、秀吉・信雄卿、同じく大権現に申入れらるゝ趣あり。是に依つて大権現、其子息秀康後に三川を上洛せしめ給ふ。時に年十一歳なり。石川伯耆守が次男勝千代・本多作左衛門重次が子仙千代後に飛騨守と號すを相添へらる。秀吉宣はく、秀康は、是れ我が養子にすべきなりとて、羽柴氏

秀吉信雄
和睦

を參らせらる。實には大權現の武勇なるを以て、腹黒なる事もやあるべきと疑ひて、人質とするが爲めなり。其後石川伯耆守は、京に上りて、秀吉卿に仕へ奉る。時の人、皆其後暗き事を誹り、口には定かにいはざれども、各石川を、嘲り思ひけるとかや。

同十三年三月、秀吉、内大臣に任じ、正二位に敘す。是より先には、秀吉自ら平氏を稱せられけるを、内大臣に任せられてより、藤原氏に改め稱せらる。

根來寺を
攻む

紀州根來寺の法師等、武命に従はず。秀吉卿軍兵を率して、彼等退治の爲め馳せ向ひ給ふ。大和大納言秀長秀吉の舎弟・羽柴中納言秀次實は三位法印一路齋の子なり。初め三好山城守が養子として、三好孫七郎と號す。後に秀吉養子としを、副將軍として赴かる。根來の僧此由聞きて、岸和田邊に、千石堀と積善寺と濱城と、三ヶ所の要害を構へて、之を防ぐ。秀吉、即ち秀次を千石堀に向へ、長岡兵部大輔藤孝・其子與一郎忠興・蒲生忠三郎氏郷を、積善寺に向へ、中川藤兵衛高山右近を、濱の城に向はしむ。堀左衛門尉秀政・筒井順慶・長谷川藤五郎秀一は、別に一萬五千の軍兵を率して、直に根來寺すくに向ふ所に、千石堀より兵五百人、横合に、堀

秀政等が軍中に打つて懸る。羽柴中納言秀次、此由を見て、兵を進めて、秀政等と一つになりて、根來の五百人を、前後より挟みて打つ。根來方、立足もなく追崩され、千石堀に逃籠る所を、附入にせんとするに、城中固く防ぐ。堀は深し要害はよし、容易く攻め落すべきやうなし。筒井順慶が手より、火箭を射込む事雨の如し。其火、既に城中鐵炮の藥篋に入りければ、城中俄に火燃え出でて燒崩れ、燒死する者、一千六百餘人なり。積善寺も濱の城も、皆逃落ちたり。秀吉猶兵を進めて、根來寺を攻めらるゝに、寺中多くは、皆老僧・兒・喝食なり。能き武者共は、千石堀・積善寺・濱城に遣し置きければ、皆落失せたり。今は防ぐべきやうなく、周章てふためき、佛像・經卷・什物をも取除くる隙なく、散々ちりぢりになりぬ。寄手の先陣、門前にして関を作れども、出合ふ者なし。軍兵寺院に亂れ入りて、金銀什物を濫妨して、俄に得付きたる者多かりし。

秀吉、夫より進みて、雜賀に至る。大田村の城に、敵兵三千餘人籠りて道を妨ぐ。秀吉宣はく、急にすべからずとて、三月廿四日、城の四方に長堤を築き、吉野川を堰

入れしかば、城中之に力を失ひ、降人にならんといふ。城主並に武勇の名ある者百五十三人自害して、秀吉卿に、城を退き渡す。秀吉、即ち中村孫平次を居ゑて守らしめ、夫より熊野山中の一揆を討たんとて、進み給ふ所に、新宮本宮の社人、其外村々里々の人民百姓等、各手を束ね膝を折りて降参しけり。秀吉公宣はく、熊野には、關役の事茂くして、旅人商人難儀すといへり。今より以後、關役を停止すべしと、熊野の別當に仰付けられけり。秀吉夫よりも、和歌の浦玉津島に至りて、遊覽ありて後、大坂に歸り給ふ。

四月十日、秀吉公、高野山の法師等を戒め鎮め給ふ。寺領の外に、押領の地あるを返し、學文を嗜みて武勇を棄て、沙門の道を行ひ、謀叛朝敵國法に背く輩、山中に隠るゝを、抱へ置くまじき由、三ヶ條の制法を定めらる。同十六日、學侶方檢校法印良運・行人方法眼空雄、既に一山の衆議を以て、細井新介に付きて請文を奉る。

丹羽五郎左衛門尉長秀卒す。年五十一。然るに長秀、平生積聚の病ありて、甚だ苦しむ。此度起り出でたるは、殊更に痛み堪へ難く、苦しかりけり。醫療其術も叶はず、

丹羽長秀
死去

百藥其功も驗なし。是に於て自ら刀を引き、腹を刺して死す。火葬の後、灰の中に、積聚を取出すに、未だ焦盡もえつきす。其大さ拳の如く、形石龜に似て、其喙は、尖り曲りて鳥の如し。刺貫きたる刀の痕、背にあり。秀吉見給ひて、誠に奇物なり。醫師の家には、斯る物迄も貯へてあるべき事なりとて、竹田法印に給はりぬ。

秀吉、四國を退治せんが爲めに、大和大納言秀長、羽柴中納言秀次を副將軍とし、六萬餘騎を率して、先づ阿波國に赴き、長曾我部新右衛門が楯籠りし和氣城を攻むるに、新右衛門、降人に出づる。副將軍大和大納言秀長卿、軍兵を進めて、長曾我部元親が弟安親が籠りし一宮城を攻めらるゝに、安親降人となる。羽柴中納言秀次の軍兵と一つに合せて、桑名左衛門が籠りし木津城を攻むるに、一夕雨風烈しきに紛れ、桑名左衛門、夜に乗じて逃落ちたり。仙石權兵衛、兵を率して讃岐に至り、八島の城を攻め落してより、四國、即ち太平になれり。秀吉、即ち阿波を蜂須賀小六家政に、讃岐を仙石權兵衛に、伊豫を福島左衛門大夫、戸田民部少輔に給はる。

秀吉、既に征夷大將軍にならんとせらる。權大納言源義昭に語り給はく、義昭は、尊氏の末なり。京

都の公方なりと雖も、天下大に亂れ、威力衰へ給ひ、公方にある甲斐なく、諸國を流浪せらる。公は貴族の末なり。我は卑賤の者なり。願はくは我を養子にし給へ。我れ正に大將軍とならん。然らば公も、富貴榮花を開き給はんとなり。義昭其天性愚にして、是非の理に昧くして、其言葉に従はず。秀吉大に恨みて、菊亭右大臣晴季に相談せらる。晴季の曰く、關白は是れ人臣の高官にして、諸人の仰ぐ所なり。將軍よりは、遙に貴き事いふ計なし。只關白になり給へと。秀吉大に喜び給ふ。

關白に任ぜらる

七月十一日、秀吉、既に關白に任せられて參内あり。織田信雄卿・大和秀長卿・羽柴秀次卿・浮田秀家・前田利家・徳川秀康等、扈從せらる。豊臣秀勝・同勝俊大和中納言と號す。大納言秀長の子。池田輝政以下、皆供奉す。

秀吉公、或時毛利輝元の家に至り給ふ時に、源義昭、庭の前に立ちてあり。秀吉公、此有様を見て曰く、義昭々々、只今はいかに〜と。義昭、手を束ねて腰を折り、大に敬へる氣色なり。義昭は、輝元が家に浪牢して、年を送らるゝとかや。秀吉を、養子の分にせらるれば、何ぞ今斯くの如くにあらんや。

秀吉公、軍を越中國におこし給ふ。前田利家は、賀州の兵を率して先陣せらる。佐陸奥守成政初は内藏助と號す。之を見て、方々の砦を引拂ひ、越中外山の城を固めて楯籠る。秀吉公、能登國石動山ゆぶらぎやまに登り、軍兵を分けて、外山の城を攻めしむ。佐々成政、防ぐ事叶はず、富田左近・津田隼人を頼みて、降を乞ひければ、秀吉公許し給ひ、成政を召連れて京に歸り、越中國をば、前田利長に給はる。

五奉行を置く

秀吉公、既に前田徳善院立以、淺野彈正少弼長政・増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・長束大藏大輔正家を、五奉行とせらる。淺野が妻と秀吉の妻は、同胞おなじはらにはあらねど、姉妹の好あるを以て、長政内外に付けて、預りさばく。前田は、信忠の推舉に依りてなり。長束は、往當丹羽五郎左衛門に仕へて、分別知慮深き事、常の人に越えたり。増田・石田は、秀吉に仕ふる事年久し。中にも増田は、利漢才覺にして武勇あり。前田徳善院には、京の所司代神社佛寺の事を知らしめ、長束には、年貢運上の事を知らしめ、淺野・増田・石田には、諸事の法度を知らしむ。大事は、五人相談して定むべし。私欲奸曲酒色に溺るゝ事なかれ、公事の訟訴訟ちんたへの事に、賄を取るべからず。

此等の條制、堅く仰付けられけり。
 信雄卿、即ち羽柴下總守勝雅・土方勘兵衛雄久を以て、東照權現に申遣さる。我れ既に秀吉と和睦せり。秀吉亦貴殿に遺恨なし。只一時の争をなしける計なり。此上は、貴殿早く京都に上らるべし。秀吉喜ぶのみならず、我も大に悦ぶべきなりと。大權現、耳にも聞入れ給はず。信雄卿の弱將淺近の智慮を、見限り給ふにこそ。

將軍記第十五終

大正四年四月十二日印刷
 大正四年四月十五日發行



發行所

東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
 振替貯金口座東京二七〇二四番

國史研究會

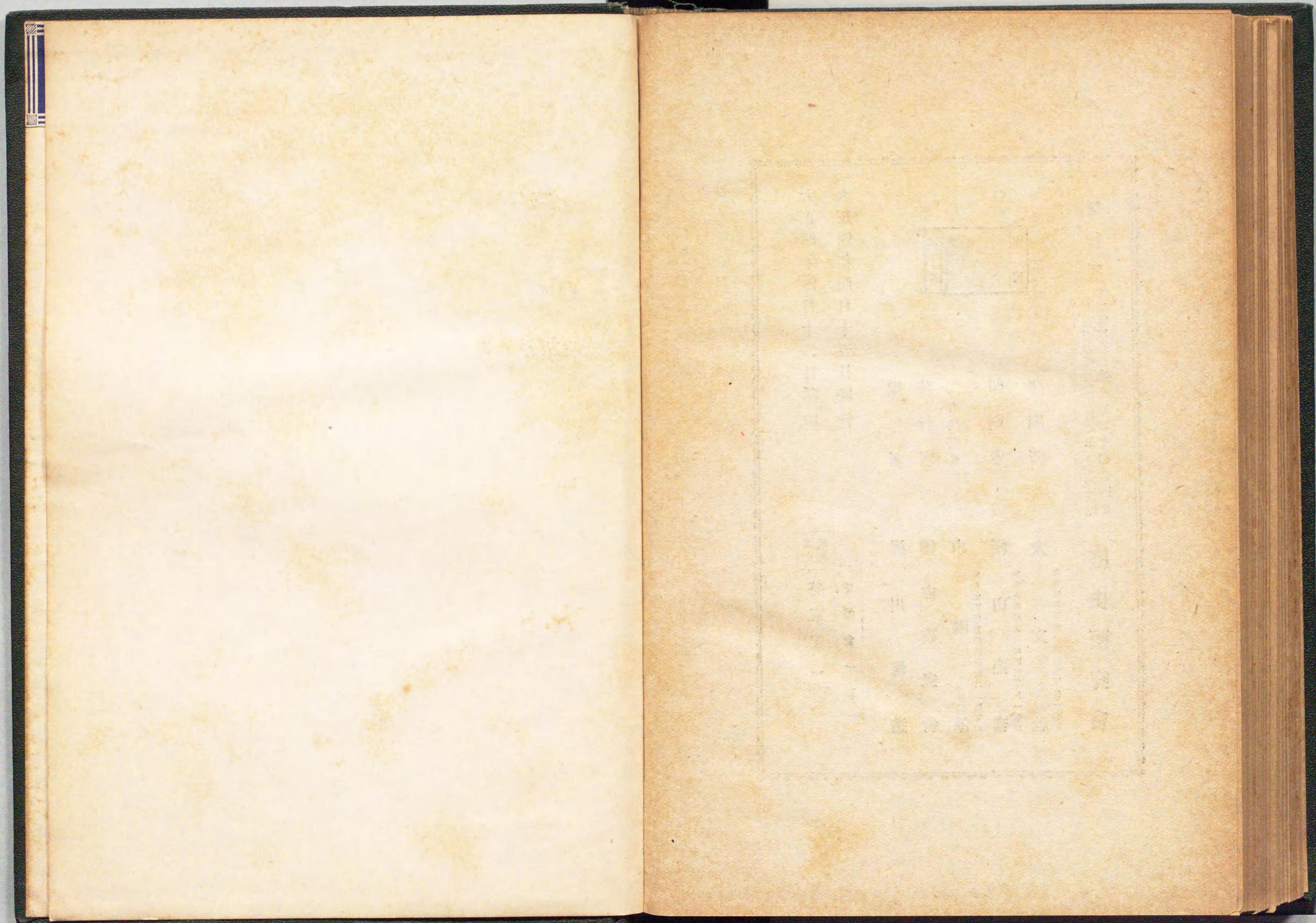
編者 黒川眞道
 發行者 右代表者 國史研究會
 印刷者 小橋淳
 印刷所 友山定吉社

國史叢書

將軍記一

定價金一圓

東京市本郷區駒込林町二二四番地
 東京市神田區三崎町三丁目一番地
 東京市神田區三崎町三丁目一番地



Faint, ghostly impressions of text or a diagram on the right page, possibly from the reverse side of the paper. The impressions are very light and difficult to discern, but appear to be organized in a structured layout, possibly a table or a list of items.

SAN-AISHA SHOTEN
電話神田二九七五番
三愛社書店

東京山縣製本場

